私立大学研究ブランディング事業
令和2年度の進捗状況

学校法人番号	401008	学校法人名	福岡大学		
大学名	福岡大学				
事業名	ライフタイムにおける活力形成による健康な時間の創造～福奏プロジェクト～				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	17120人
参画組織	基盤研究機関研究所、産学官連携研究機関研究所、医学部、薬学部、スポーツ科学部、人文学部				
事業概要	現代社会において、子育て力の低下、学校不適応の子供の増加、生活習慣病の蔓延、高齢者の認知症や閉じこもりなど、健康な時間を過ごせない問題が生じている。本福奏プロジェクトは、家族支援、学校教育支援や中・高齢者活動を通じて、身体的・心理的・社会的介入を実施し、活力ある人間をつくる健康先進プログラムを開発することにより、大学の「知」を社会の『価値』に転換し、健康持続社会の実現につなげる。				
①事業目的	本学のスローガンである「人をつくり、時代を拓く。」は、教育方針として掲げる全人教育を「人をつくり」に託し、教育・研究・医療を通じて、社会の発展に積極的に貢献している姿を「時代を拓く」に託している。創立100周年に向け、「建学の精神」に立ち返り、「積極進取」の気概を持って「明るく闊達な大学」の実現に向け「Rise with Us」を掲げ活動している。本事業の目的は、「社会に活力を生み出す福岡大学」として、ライフタイムにおける活力を形成し、健康な時間を創造することである。そのため、福岡大学における医学、薬学、スポーツ科学さらには教育・臨床心理学の成果をもとに、自治体及び企業と連携して「福奏（フクソウ）」プロジェクトを展開する。福奏とは、地域の助け合いを基盤に、人々の福（ハッピー）を奏でることにより、健康持続社会の実現を目指すことである。				
②令和2年度の実施目標及び実施計画	令和2年度の目標 チームⅠ　【中高年期の社会活動支援・活力ある高齢者の研究】 　健康づくり：健康増進プログラムの量的質的拡充を図る。 　サイバニクス：その他の適応疾患の可能性を探り、身体機能低下者に対する機能回復プログラムへの応用を図る。 　社会活動支援：研修プログラムに係る福大方式を確立していく。 チームⅡ　【学童期・思春期の学校適応支援・活力ある人間形成の研究】 　学校適応：成果を報告書にまとめ、全国の学校関係者に周知する。 　体育支援：体育支援の各プログラム間の整合性を図る。 チームⅢ　【妊娠・出産及び子育て期の子どもといる生活の研究】 　効果的な子育て支援の方策を、次世代の親となりうる大学生に適応する。切れ目のない支援を行うためにも、「小児科かかりつけ医」との協働を行う連携モデルを作成する。 【ブランディング】ブランディングで顕著な効果を生んでいる取り組みとそうでない取り組みを把握し、全学的にそれらの情報を共有する。 令和2年度の実施計画 Ⅰ　健康づくり：旅行会社やIT企業との共同プログラムを考案し、産学連携協議会企業等で実証する。スロージョギング®協会と連携し、ドイツ、スイス、オーストリアに健康プログラムを普及させる。⇒参画団体数（目標10団体）、3ヶ国への普及が達成されたかで評価する。 　サイバニクス：対象とした疾患にて身体機能の特異的側面からの効果を検証する。⇒血流改善効果、筋繊維や筋力・酸素摂取量・バランス・神経応答といった観点からの効果を整理できたかで評価する。 　社会活動支援：自治体でのコミュニケーション研修スキルのシステムを整える。⇒高齢者サポートプログラム（福大方式）が完成したかで評価する。 Ⅱ　学校適応：効果判定のために実施した「社会的スキル尺度」の結果をまとめ、担任の先生からの感想を半構造化面接によりまとめる。⇒報告書を作成し教育相談学会に投稿し、全国の先生に向けて発信できたかで評価する。 　体育支援：体力評価による分析結果を踏まえ、体育支援の内容がブラッシュアップされると共に、各プログラム間の役割や位置づけを明確にし、それらの整合性を図る。⇒各児童の課題に即した運動を取り入れ、運動神経の向上に繋がっているかで評価する。 Ⅲ　本学の学生に子育て支援プログラムを実施する。「小児科かかりつけ医」との連携モデルを作成するため、小児科医/スタッフと協働できる支援策を策定・展開する。⇒支援プログラムを実施した本学学生数（目標100名）と連携モデルが作成できたかで評価する。 【ブランディング】広報課で、全学的にヒアリングやアンケートによるブランディングに関する情報収集を行い、ブランディングの改善につながる情報提供を行う。				

③令和2年度の事業成果	チームⅠ　【中高年期の社会活動支援・活力ある高齢者の研究】 　健康づくり：昨年度にヘルスツーリズム（HT）プログラムに参加した一般市民4名を対象に、1年後簡易測定を実施した。4名とも開始から3か月後までは体重、体脂肪率の減少を認めていたが、コロナ禍の影響を受けた1年後測定では、2名が3か月後からの増加、2名が維持または減少を認めた。中でもコロナ禍においてもスロージョギング®を継続していた1名は、1年間に渡り体重、腹囲および体脂肪率を減少させていた。また、フレイルに対する介入の一つとして漢方薬と身体的運動に着目し、老化促進マウスを用いた効果検証を行った。牛車腎気丸摂取とランニングホイールを使った自由走行の組み合わせは、認知機能向上を示さなかった。さらに行政と連携して開催されたHTのモニターツアーにおいて、提供される食材に関する薬膳的解釈とその解釈をサポートする科学的根拠を研究論文より検索し、食材の健康に関する情報を提供した。 　社会活動支援：教育プログラムを受講した企業社員による高齢者ケアサポートを、昨年度よりも地区を拡大するとともにUR都市機構との連携も見据え計画していた。さらに企業社員の防災に関する研修の推進を目標としていた。コロナ禍の影響を受け、予定していた活動の多くは中止となったが、協力機関（福岡市、福岡市社会福祉協議会、早良区社会福祉協議会）とともに、田隈校区住民、民生委員と連携しながら、地域高齢者ケアサポートの打ち合わせまで実施した。産学官民が連携することは、今後重要となることが予想される。何が求められ、何ができるか検討・評価することが重要である。 チームⅡ　【学童期・思春期の学校適応支援・活力ある人間形成の研究】 　学校適応：SST（Social skills training）を3年間体験した約150名の小学生にどのような変化がみられたか、また担任の先生たちがSSTをどのように評価しているかについて検討した。3年間のSSTプログラムを通して、「社会的スキル尺度（小学生版）」の結果から同級生との関わりの点で良い変化が見られた。人との関わりに関するスキルをSSTで扱ったことで、同級生との関わり方に変化が生じたのではないかと考えられる。また練習したことが活かされ、社会的スキルの向上、自信、自尊感情の向上に役立っていることが認められた。6年次の担任のインタビューからSSTを体験することによって子どもたちは、お互いの良いところに気付き、自分自身が社会的スキルを使用していることを認識するようになったことが明らかになった。担任の先生方も「児童を褒める回数が増えた」などSSTを通して児童への関りに良い変化が生じていたと考えられる。 　体育支援：コーディネーショントレーニング（CT）では、体育授業における導入・応用方法をテーマとした小学校教員向けの研修会を3回実施した。CTの効果検証を目的とした、小学校の体育授業における介入研究に関しては、メンタルヘルスの軽減効果やスプリント能力の着実な向上効果が確認されている。CTに係るアウトソーシングでは、書籍内での研究成果の執筆や、福岡県内の全ての小学生児童（3年生以上）へ配布された西日本子ども新聞において、もやもや気分を吹き飛ばすCT運動プログラムを作成し、運動内容の解説動画を作りQRコードを紙面に添付する形式で、スマートフォンからのデジタルメディア・アクセスを主とする資料を執筆した。体力測定サポートでは、前年度までのデータを用いて生まれ月と体力との関係を再検討した。生まれ月の違いは児童期の身体組成・運動能力に対しても影響を与えることが示唆された。 チームⅢ　【妊娠・出産及び子育て期の子どもといる生活の研究】 　新型コロナウイルス感染予防のためほとんどの計画が実施できなかったが、子育て期における支援として福岡市との共同開催で2講座実施した。例年に比べ参加人数を半減にて実施した。①「福岡市保育士アレルギー研修会」福岡市保育園等職員に対する食物アレルギー児の対応についての理解を図る事を目的に開催した。保育士73名、調理等職員39名、施設長6名、看護師5名が参加し94％が「非常に参考になった・参考になった」と回答した。②「福岡市健康安全研修会」【基礎編】福岡市認可保育園職員に対する子どもの事故や体調不良時の対応についての理解を図ることを目的に開催した。保育士113名、施設長7名、看護師7名、調理等2名で93.5％が「非常に参考になった・参考になった」と回答した。③「福岡市健康安全研修会」【実践編】今年は対面での実施ができず、DVDを作製した。緊急時対応園内研修DVDは4章（「けいれんについて」「園内研修の進め方」「シミュレーション研修の進め方」「研修の実際」）で構成した。対象は【基礎編】終了者で希望した約80施設へ配付し視聴後の効果評価を依頼している。 【ブランディング】法人の中長期計画が新たに策定されたことに伴い、大学が目指すブランドポジションの再検討を行った。また、学内外におけるブランドイメージを形成するため、オウンドメディア「FUKUDAism」の運用を新たに開始した。ブランディングに関する会議体については、広報委員会の審議事項にこの事項を追加し、会議体の整理を行い効率化等を図った。
④令和2年度の自己点検・評価及び外部評価の結果	（自己点検・評価）HPの更新回数は計21回（日本語版14回・英語版7回）であった。事業開始から令和2年9月までの進捗報告書を作成し、HPで公開した。例年同様、事業計画書や報告書の取りまとめと外部評価の実施、感染症対策に配慮した上で研究ブランディング推進会議の開催等に取り組んだ。コロナ禍の影響を受け、計画通りに進めることが困難な一年であった。
	（外部評価）外部評価委員7名（有識者・企業・自治体）から、令和2年度報告書に対する評価（書面）を頂いた。withコロナ、postコロナを見据えweb会議や動画配信等のオンラインツールやITの積極的な導入、非対面、遠隔での活動環境整備、デジタル化を念頭に各テーマのDXを論じプロジェクトの一層の進化に繋げること等への、コメントや期待を多く頂いた。
⑤令和2年度の補助金の使用状況	大学負担　12,507,522円